建設の時代

堀田善衛

建設の時代 堀田善衛

堀田善衛

建設の時代

堀田善衛

新潮社

建設の時代

一九六〇年一月一六日印刷
一九六〇年一月二〇日発行

定価 三三〇円

著者 堀田善衛
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話 東京(269)七一一一～九
振替 東京八〇八番
印刷 三晃印刷株式会社
製本 新宿加藤製本所
(落丁のものは本社又はお買求めの書店でおとりかえいたします)

© 1960 Y. HOTTA. Printed in Japan

目次

存在の機軸……七
建設の時代……一三
雪の中に燃える欲望……一九
漁業交渉を見つめる人達……二八
映画製作工場……五八
繁栄する日本……七七
二重生活の見本市……九三

二つの衝撃……一二三
難関にきた日中問題……一二八
歴史と道徳の問題……一三一

さいはての旅……一三六
金沢にて……一三〇
伊勢神宮にて……一三三
日本特産ロカビリー連……一三六
ドーロと出前持ちについて……一四一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

きのうきょう

八百屋人民公社　いまさら　他山の石　どの面さげて　消防と酒　暴力音楽　汚職・汚職　「火の如く風の如く」　安全保障？　ペン・クラブ　如前として！　民主主義破壊　同人雑誌から　裁判　悪夢と記憶　荷風永眠　ある会話　ドイツのグレン隊　記者とスパイ　IOCと大笑い　韓国からの報道　流れる　約束と希望　オンブオバケ

日本の知識人……一六
日本文学の怪談師たち……三一
日本文学の若き獅子たち……三六
「大菩薩峠」とその周辺……二六〇
机龍之助の成立　一つの虚無的な心
性　発想とその影響　その外延

装幀　藤森健次

建設の時代

存在の機軸

おれはいったいどういうわけがあって現に存在してい、またどういうわけあいのために現に存在しているのだろう、という、阿呆らしいような、深刻なような疑問。

こういう疑問が、二六時中とは義理にも申せぬが、一仕事しようと思い立つなり、しなければならぬと思いきめたりしたときに、必ず（といっていいだろう）頭のどこかから湧いて出て来て、ペンをとっつかまえて動きのとれぬような具合にしてしまう。だから、仕事をする、はじめるためには、薪を割るなり、畑をするなり、あるいは散歩に出るなりして、前述の疑問の奴をなんとかあやすなりいなすなりして、そいつをしばらくどこかの片隅へ押し込めてかかるという仕儀になる。つまり、厄介払いをしてかからぬというと仕事にならぬのである。従って、その仕事と称するものは、どうかすると（いや、どうかするとではない、まるまるみんなは、といわねばならぬだろう）——存在理由とはなるべくはなれた、濁り水の上澄み程度のものをつづりあわせて行く

ということになる。しかし、そんな具合な仕事では、いつまで、いくらそれをつみかさねても、かくてはならじという焦躁感を消すことは出来ない。そうして、たまたま勇をふるって自分の混濁の奥底をのぞこうとすると、そこに、あるいは底に、からっぽこなもの、緊張・充実がそのままで空虚さであり、その空虚さがそのままで緊張・充実でもあるというにちかい、化物みたいなあやういものを見出してギョッとする。中村光夫は、イスタンブール大学で、日本の知識階級はいまどんなことを考えてるかと問われて、「生活の中心になる思想が見出せなくて困っている」と答えている。(中村光夫「トルコの話)」

こういう風な感じのものは、私は、ただ私ひとりだけにあるものではない筈だ、とひとりぎめにきめこんで、他の文学者、また他の世界ではどういう具合式になっているか、とひそかに明治以来のいろいろな分野での先覚者の言動をものの本によって、調べてみる。いまここでは、伊藤博文のことを少し書く。少しといっても、私の考えは少ししかないが、引用は長々とする。

さて、次に引用するのは、一八八八年六月十八日、枢密院議長としての伊藤博文が明治憲法の草案審議を開始するについて、起草の主旨について行った演説の大要である。

読む人は、伊藤の言う「憲法政治」を「近代文学」ととっかえて読まれてもいいだろうし、何をどう読まれるも勝手次第である。すなわち、

「憲法政治は東洋諸国に於て曾て歴史に徴証すべきものなき所にして、之を我日本に施行するは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

事全く新創たるを免れず。故に実施の後其結果国家の為に有益なる歟或は反対に出づる歟予め期すべからず。然りと雖二十年前既に封建政治を廃し、各国と交通を開きたる以上は、其結果として国家の進歩を謀るに此れを捨てて他に経理の良途なきを奈何せん。夫れ他に経理の良途なし、而して未だ効果を将来に期すべからず。然れば則ち宜く其始に於て最も戒慎を加へ、以て克く其終あるを希望せざるべからざるなり。已に各位の暁知せらるる如く、欧州に於ては当世紀に及んで憲法政治を行はざるものあらずと雖、是れ即ち歴史上の沿革に成立するものにして、其萌芽遠く往昔に発せざるはなし。反之我国に在ては事全く新面目に属す。故に今憲法を制定せらるるに方ては、先づ我国の機軸を求め、我国の機軸は何なりやと言ふ事を確定せざるべからず。機軸なくして政治を人民の妄議に任す時は、政其統紀を失ひ国家亦た随て廃亡す。苟も国家が国家として生存し人民を統治せんとせば、宜く深く慮りて以て統治の効用を失はざらん事を期すべきなり、抑欧州に於ては憲法政治の萌せる事千余年。独り人民の此制度に習熟せるのみならず、又た宗教なる者ありて之が機軸を為し、深く人心に浸潤して人心此に帰一せり。然るに我国に在ては宗教なる者其力微弱にして一も国家の機軸たるべきものなし。仏教は一たび隆盛の勢を張り、上下の人心を繫ぎたるも、今日に至ては已に衰替に傾きたり。神道は祖宗の遺訓に基き之を祖述すと雖も、宗教として人心を帰向せしむるの力に乏し。我国に在て機軸とすべきは独り皇室あるのみ。是を以て此憲法草案に於ては専ら意を此点に用ひ、君権を尊重して成るべく之を束縛せざらん事を勉めたり。（以下略す）」

こういう主旨であったからして、一八八九年二月十一日にこの憲法が公布されて、二月十五日、全国の府県会議長に向って、伊藤が「……将来如何の事変に遭遇するも、日本に於ては開闢以来の国体に基き、上元首の位を保ち、決して主権の民衆に移らざることを希望して止まざるなり。……」とこの一点を特に強調することになるのであるが、私がいまここで言おうと思うことは、思想に関連してのことであって、直接政治に関してではない。伊藤博文は神道を軽視しているけれども、それの専門学者であった折口信夫を別格とすれば、神道のもつある種の恐しさについて、ちらりと触れたものには、芥川竜之介の「神神の微笑」一編がある。

（引用は二つとも「春畝公追頌会」著作になる「伊藤博文伝」の中巻。前者は六一四―六一六頁、後者は六五六頁から）

ところで、これだけの引用によってでもわかることは、明治憲法というものが、進んで制定されたものにちがいはないが、その実は国内外の情況にかんがみてやむなくつくり出されたものであった、ということである。そして、私がもっとも興味をひかれるのは、「我国に在ては事全く新面目に属す」というあたりから、「我国の機軸は何なりやと言ふ事を確定せざるべからず」というくだり以下である。

つまり、このあたりに、伊藤博文が外遊して、西欧の社会生活、政治生活というものにおいて、いかに「宗教なる者ありて之が機軸を為し、深く人心に浸潤して人心此に帰一」していたか、そ

の現実に深くうたれたか、その感慨がつよくあらわれていると思われる。これを逆にする、あるいは憶測を敢てするならば、西欧との対比においては、我国における生活にいかに「機軸たるもの」がないかということに、伊藤は驚愕したかもしれないと思う。旧憲法の土台には、少くともこういう種類の危機感があったということは認められていいと思う。

人は、たとえば正宗白鳥の「いよいよ盛んな批評活動」（菊池寛賞授賞の際の賞を与えた側のことば）について、屢々おどろきのことばを述べる。けれども、正宗氏の、秘密でもなんでもない秘密は、人生に生と死以外の機軸なるものがなにひとつありはしないらしいということを、祖述して来た点にある。

逆にいえば、人生に何等かの機軸ありとした人は、ほとんどが、右にしろ左にしろなんにしろ、横死に近い死をとげているということになるであろう。たとえば内村鑑三をも私はその一人にかぞえる。しかも正宗氏にしても、その生涯を円満具足なものとも思わぬという事態がもうひとつ重なっている。

いまさら野暮なことを、などというなかれ。日本において、生活というものがどういうものとして考えられ意識されているかということを、われひとともに考えてみたいと思う。

私の考えでは、生活の機軸になって来たものは、広い意味での美意識といったものであって、具体的には、文化の諸分野のなかでも、文学が主要な、あるいは過重な役割をになって来た、と

思う。ある場合には、哲学倫理の代りの役をさえ、して来た。私小説は生活哲学としての役割をもっていた。革命運動の機軸となったことさえあった。文学はそういう役割をにないながらも、厳密にいって文学自体のなかに発展、進歩という概念、あるいは段階説めいたものを見出すことは困難であるために、進歩、発展、段階説的なるものは、すべて外国、つまりは西欧から入って来るものにかこつけることによって、経由によって、保たれて来た。かこつけることによって、このところ数十年の日本社会の変化に対応して来た。そういうことは、しかし、どうやら今日ではなくなって来たようである。経由地がなくなって来て、ほとんど零距離射撃になって来た。言い換えれば、正統性をどこにもとめるかということになろう。それが認められなければ反抗すらも意味をもちにくいであろう。

私自身について言えば、零距離射撃とは、立往生のことである。私はそのことをかくそうとも思わない。事にぶつかっては立往生をしている。立往生をしては、さまざまな物や事それ自体のもつ矛盾と、それにぶつかっている自分自身のなかの矛盾、またぶつかることによって生じる新たな矛盾。日本について、日本文化について、そのさまざまな矛盾を、西欧の文化典型をクッションにしてまるで玉突き遊戯のように手玉にとることは私に出来もしないし、望みもしない。私に希望があるとしたら、それは矛盾そのものがもつ力を信じるということにある。エッセイをあつめ補筆して一冊を編んだ所以であった。

建設の時代

——戦後十五年目の感想——

いまはいったいどういう時代なのでしょうか。

敗戦後十五年目をわれわれは迎えようとしています。われひとともに、自らに問うてみるだけの余裕は出来たはずだと思うのです。

食い物にしろ読むものにしろ、手当り次第、イモでもリンゴでも西田幾多郎でも、サルトルでもなんでもかでも、手から口への時期は、もうはるか以前のことになり、食い物にしろ、食い物屋にしろ、読むもの、見るもの、聞くもの、某氏の小説の題名のように、それはもう「氾濫」しています。このはんらんのなかに、ときとして溺没しかけさえするような心持ちがします。

またときとして、政治向きのことなど放り出して、そこに溺没してしまいたい気がすることもないではありません。溺没する、あるいはしたくなるということは、しかし、これをひっくりかえして考えてみるならば、それはやはり、ある種の余裕の産物でありましょう。そうならそうで、

その余裕を活用して、敗戦後十五年目、われわれはどういう時代に生きてい、またどういう時代にこれから入って行こうとしているのか、それをここらでいちど確めておく必要があろうと思います。

日本のいまはいったいどういう時期、時代なのでしょうか。なにがわれわれの国のいちばんの苦労の種になっているのでしょうか。

ある人は言います。敗戦後の、あの荒涼たる状態から復興し、もう復興の段階はとうにのり越してしまって、このおめでたい状態をより発展させて月給を二倍にするんだ、どうだ、うまいじゃないか、と言います。私も、なるほど、と思います。うまい時代に生きているらしいぞ、と思います。そういう、うまい時期、時代を、アメリカの核兵器やらミサイルやらをもった軍隊に庇護していてくれるように頼んでいるんだ、と言います。ここらあたりまで来ると、どうやら話は少しうますぎる、出来すぎているという感じがして来て、まゆにツバをつけてかからねばならぬような気がして来ます。そのおかげでもって、韓国だの台湾だのというところと、なにやらねばっこいかかりあいになるらしい、となると、いよいよへんな気がして来ます。

戦後の、あの荒涼とした有様、気の立った状態からの再建、復興の段階からだけは、とにもかくにもわれわれは脱け出すことが出来たと思います。ここらで、テレビの野球でも見て、ヒト息を入れたい気がします。山か海へでも行って、別な空気のかたまりも吸いたい気がします。ともかく、われわれのなかのどこかに、やれやれ、と息をはきたい気持のあることは、やはり否定で

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com